

「貨幣の資本への転化」と労賃範疇

坂 脇 昭 吉

„Die Verwandlung von Geld in Kapital“ und die Arbeitslohn-Kategorie

Akiyoshi SAKAWAKI

I

周知のようにマルクスは、『資本論』第1部「資本の生産過程」、第2篇「貨幣の資本への転化」のところにおいて、「商品や価値や貨幣や流通そのものの性質についての以前に展開されたすべての法則に矛盾している」¹⁾ ところの「剰余価値の形成、したがって…貨幣の資本への転化」²⁾ を説くにあたって、しかしながらやはり、「等価物どうしの交換が当然出発点とみなされる」³⁾ ところの「商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきである」⁴⁾ とした。そしてマルクスは、その「資本の一般的範式の矛盾」の解決のために、「現実の消費そのものが労働の対象化であり、したがって価値創造であるような1商品……労働能力または労働力 (das Arbeitsvermögen oder die Arbeitskraft)⁵⁾ を導入したのである。

マルクスのこうした方法に対して宇野弘蔵氏は次のような疑問を提起した。すなわち、第2篇「貨幣の資本への転化」について、「この篇は商品、貨幣の場合とは説き方が異ってきている。……むしろここでは『資本の一般的定式』と、その『矛盾』、その矛盾の解決としての『労働力の売買』として、『定式』を中心に説いてある。それは形態規定としてもやや異なったものを感じるのである。……商品、貨幣の場合と異なって、一般的に資本の規定にはそういう歴史的形態に対応した理論的展開が必要になるのではないか」⁶⁾。このように、マルクスが「商品と貨幣」のところでも展開した方法であるいわゆる発生史的な意味における歴史的展開と論理的展開との照応関係が、「貨幣の資本への転化」のところでは不十分である、と言うのである。そして「『資本論』はこの《貨幣の資本への転化》を明確に商品・貨幣に続く形態規定として十分には展開しえなかったのである」⁷⁾ と断言する。

以上のような宇野氏の問題提起をめぐって、マルクスの方法こそが正しいとして『資本論』を擁護する立場⁸⁾ からの反論や、あるいは宇野氏の説をより「厳密」にし、補強しようとする試み⁹⁾ 等々数多くの議論がくり返されてきた¹⁰⁾。そしてそれは今だ完全に結着がついたとは言い難い問題として『資本論』研究の重要な対立点になっているのである。なぜなら、この「貨幣の資本への転化」の論理展開の方法をどう理解するかは、『資本論』全体の論理構成の展開自体をどう理解す

るのか、という問題を、ある意味では決定づける問題でもあるからである。より根本的には、この問題は、マルクスの経済学の方法としての論理と歴史の問題を、どう理解するのかについての基本的な内容そのものをなすからである。

そこで私はこの小稿において、こうした「貨幣の資本への転化」をめぐる論議を念頭に置きながらも、これまで若干等閑視されてきたと思われる労賃範疇を、貨幣の資本への転化との関連で捉えなおしてみようと思うのである。すなわち、「貨幣の資本への転化」を解くにあたってマルクスが導入した労働力商品を単に歴史的範疇としてのみ捉えるのではなく、論理範疇としても捉えなおしてみることによって、「貨幣の資本への転化」の問題を別な角度からもながめてみようと思うのである。

- 1) Marx, K., *Das Kapital*, 1867, Bd. I, *Werke*, Bd. 23, 1962, S. 170. 訳, マル=エン全集刊行委員会訳『資本論』, 第1巻第1分冊, 1967, 大月書店, 203~204 ページ。以下, *Das Kapital*, I, S. 170. 訳〔1〕-a, 203~204ページというふう略す。
- 2) *Das Kapital*, I, S. 175. 訳〔1〕-a, 211ページ。
- 3) *Das Kapital*, I, S. 180~181. 訳〔1〕-a, 217ページ。
- 4) *Das Kapital*, I, S. 180. 訳〔1〕-a, 217ページ。
- 5) *Das Kapital*, I, S. 181. 訳〔1〕-a, 219ページ。
- 6) 宇野弘蔵『宇野弘蔵著作集』, 第6巻, 171ページ, 岩波書店, 1974年3月, 源出『資本論入門』, 創元文庫。こうした点について氏は別なところでも次のように述べている。「資本の産業資本的形式は, 商人資本的形式や金貸資本的形式と異って, 資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない。この形式のいはば基軸をなす労働力の商品化は流通形態自身から出るものではないからである。……労働力の商品化の基礎をなす, 生産手段を失った無産労働者の大規模的出現は, 資本主義に先きだつ封建的社会自身の崩壊によるものであって, いわゆる単純なる商品生産者としての小生産者が, 商品経済によって分解されて生ずるというようなものではない。……小生産者の分解は, どこまでも, またいつでも近代的無産労働者を出現せしめるとは限らない」(同『経済原論』, 44ページ, 岩波全書, 1964年5月)。
- 7) 同『経済学方法論』, 316ページ, 東大出版会, 『経済学大系, I』, 1962年2月。この点に関して氏はより詳しく次のように述べている。「論理的にも『貨幣の資本への転化』は, $G-W-G'$ の商人資本的形式から, $G\cdots G'$ の金貸資本的形式を経て $G-W\cdots P\cdots W'-G'$ の産業資本的形式を展開するものとしなければならない」(同上)。
- 8) ひとまず次のものをあげておこう。見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』(青木書店, 1968年8月), 見田石介・横山正彦・林直道編著『マルクス主義経済学の擁護』(新日本出版社, 1971年12月)。さらには, 立場は違いが佐藤金三郎『「資本論」と宇野経済学』(新評論, 1968年11月), 毛利明子『資本論の転化論』(法政大学出版会, 1976年1月)がある。なお, 最近の論文としては, 宮下柁次「『貨幣の資本への転化』論(上),(下)」(札幌商大, 短大『論集』, 15号, 16号, 1975年, 1976年), 吉田 紘「貨幣の資本への転化」(東北大『研究年報, 経済学』, Vol. 37, No. 2, 1975年)などが有益である。
- 9) さしあたりは, 降旗節雄『資本論体系の研究』(青木書店, 1965年9月), 鎌倉孝夫『経済学方法論序説』(弘文堂, 1974年4月)の研究をあげておこう。
- 10) この論争を詳しく紹介していて有益な論文に, 姫野教善「『貨幣の資本への転化』に関する一考察(1)~(5)」(北九州大学『商経論集』所収, 1970年1月~1972年3月)がある。

II

ところでマルクスは, 貨幣の資本への転化を論じるなかで, それとの関連においてまず, 資本の

生成と労働力商品の創出との関連について次のように明らかにしていた。すなわち、貨幣が資本へ転化するためにはまず、「貨幣所持者は商品市場で自由な労働者に会わなければならない」¹¹⁾が、その自由な労働者と貨幣所持者との出会いは、「自然史的な関係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的な関係でもない。それは、明らかに、それ自体が、先行の歴史的発展の結果なのであり、多くの経済的変革の産物、たくさんの過去の社会的生産構成体の没落の産物なのである」¹²⁾と。ここに資本の生成の歴史的独自性がある。

ところが、資本の基礎形態である商品や貨幣の「一般的諸範疇」の場合は、それ自体としては一応「歴史的な痕跡を帯びてい」¹³⁾た。例えば商品が出現するためには、すなわち生産物が商品として現われるためには、「社会内の分業がかなり発展して、最初は直接的物々交換に始まる使用価値と交換価値との分離がすでに実現されていることを条件とする。しかしこのような発展段階は、歴史的に非常に違ったいろいろな経済的社会構成体に共通なものであった」¹⁴⁾。さらに貨幣についても、それは「商品交換のある程度の高さを前提する」¹⁵⁾ といえ、「種々の特殊な貨幣形態……が形成されるためには、経験の示すところでは、商通流通の比較的わずかな発達で十分であ」¹⁶⁾った。ところが、資本それ自体は決してそのようなさまざまな発展段階において発生しうるのでなく、それは「生産手段や生活手段の所持者が市場で自分の労働力の売り手としての自由な労働者に会おうときにはじめて発生するのであり」¹⁷⁾、マルクスはこのことを称して、「この1つの歴史的條件が1つの世界史を包括しているのである。それだから、資本は、はじめから社会的生産過程の1時代を告げ知らせているのである」¹⁸⁾ と述べていた。

このように資本制的生産関係を創り出す過程は、明らかのように1つの歴史的過程であって、同時にそれは直接生産者から彼らの生産手段を分離させる過程であって、彼らを賃銀労働者に転化させる過程にほかならなかった。それゆえ「いわゆる本源的蓄積は、生産者と生産手段との歴史的分離過程 (der historische Scheidungsprozeß) にほかならないのである」¹⁹⁾。

次に、こうして創り出された労働力商品が何故剰余価値を形成しうることについて、マルクスは次のように明らかにしていた。すなわち、まず以上のような歴史的な過程を通して生まれたところの労働力商品は、その創出の過程で次のような2つの意味での自由な性質を付与されていた。「自由な人として自分の労働力を自分の商品として処分できるという意味と、他方では労働力のほかに商品として売るものをもっていないと、自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解放されており、すべての物から自由である」²⁰⁾。つまり、全ての身分的拘束から解放されていると同時に、生産手段を奪われていることによって他人に自らの労働力を売る以外に生きてゆくすべがない、という点である。こうして生産手段を奪われた労働者と、生産手段を私有し得た資本家とが必然的に結合することになるのであって、労働者は資本家の監督のもとで生産を行うことになる。ところが他方で、労働力商品とは「価値の源泉であるという独特な性質をその使用価値そのものがもっているような1商品……、つまりその現実の消費そのものが労働の対象化であり、したがって価値創造 (Wertschöpfung) であるような1商品」²¹⁾ でもあった。こうした特質をもった

労働力商品が、商品交換の法則にもとづいて資本家と対応する。「資本家は、労働力のたとえば1日分の価値を支払う。そこで労働力の使用は、他のどの商品の使用とも同じに、……彼が資本家の作業場にはいった瞬間から、彼の労働力の使用価値、つまりその使用、労働は、資本家のものになったのである」²²⁾。そこで資本家は第1に商品を生産しようとする。第2に彼は当然のごとく彼が生産に当って支出した「生産手段と労働力との価値総額よりも高いことを欲する」²³⁾。こうして資本家は使用価値としての商品だけを生産しようというのではなく、「価値を、そしてただ価値だけでなく剰余価値 (Mehrwert) をも生産しようとするのである」²⁴⁾。こうした資本家の意図と願望は次のような事情によって達成されることになる。すなわち、先にもみたように、まず資本家は労働者に労働力の日価値を支払っている。だから1日の労働力についての使用は資本家のものである。それ故、「労働力はまる1日活動し労働することができるにもかかわらず、労働力の1日の維持には半労働日しかかからない……、したがって、労働力の使用が1日につくりだす価値が労働力自身の日価値の2倍だという事情は、買い手にとっての特別な幸運ではあるが、けっして売り手に対する不法ではないのである」²⁵⁾。

しかも、例えば「宝石細工労働者がただ彼自身の労働力の価値を補填するだけの労働部分は、彼が剰余価値をつくりだす追加的労働部分から、質的には少しも区別されないのである。相変らず剰余価値はただ労働の量的超過 (quantitativen Überschuss) だけによって、同じ労働過程の、すなわち……宝石生産の過程の、延長された継続だけによって、出てくるのである」²⁶⁾。

以上のようにマルクスは、資本主義社会の経済的運動法則の基本としての剰余価値の形成、すなわち貨幣の資本への転化の内実が、歴史的過程において創り出された労働力という商品の特質に起因していることを明らかにした。この点をとらえて、一般には、『資本論』における「貨幣の資本への転化」の展開方法を批判する側も、マルクスの方法を擁護しようとする側も共に、労働力商品が歴史的な産物として創り出されたが故に、貨幣の資本への転化をマルクスは歴史的要因を導入することによって、あるいは、資本の生成それ自身が歴史的過程そのものだと説明しているとの認識に立っている場合が多い²⁷⁾。しかしながらマルクスは、貨幣の資本への転化の論理を、いな資本制的生産様式の生成と確立それ自体を基本的に支える労働力商品範疇を、単に歴史的産物として、歴史的範疇としてのみ捉えているのだろうか。歴史的範疇として捉えることの重要性和同時に、他方で、労働力商品が歴史的に創り出されてきたその過程をも含めて、マルクスが展開した労働力商品それ自体の論理的範疇としての意義についてもまた省りみる事が重要ではないだろうか。

11) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳[1]-a, 221ページ。

12) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳[1]-a, 222ページ。

13) *Ebenda*.

14) *Das Kapital*, I, S. 184. 訳[1]-a, 222ページ。

15) *Ebenda*.

16) *Das Kapital*, I, S. 184. 訳[1]-a, 222~223ページ。

17) *Ebenda*.

- 18) *Ebenda.*
- 19) *Das Kapital*, I, S. 742. 訳〔1〕-b, 934ページ。
- 20) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳〔1〕-a, 221ページ。
- 21) *Das Kapital*, I, S. 181. 訳〔1〕-a, 219ページ。
- 22) *Das Kapital*, I, S. 200. 訳〔1〕-a, 243ページ。
- 23) *Das Kapital*, I, S. 201. 訳〔1〕-a, 245ページ。
- 24) *Ebenda.*
- 25) *Das Kapital*, I, S. 208. 訳〔1〕-a, 254ページ。
- 26) *Das Kapital*, I, S. 212. 訳〔1〕-a, 259ページ。
- 27) 宇野弘蔵氏の見解についてはすでに先に示したように自明だが、例えば佐藤金三郎氏もこの点に関して次のように述べている。「『資本論』では、マルクスは『貨幣の資本への転化』の謎—いわゆる『一般的定式の矛盾』—を商品、貨幣の場合と異なり、貨幣から資本を『単純に「演繹」する』ことによってではなく、歴史的与件としての労働力商品を導入することによって、いかえれば『研究の領域に歴史的条件をひき入れる』ことによって解決したのである」（同、前掲『『資本論』と宇野経済学』、186ページ）。なお、佐藤氏の宇野理論批判に関するコメントとしては飯田裕康氏の佐藤前掲書の書評が有益である（慶応義塾『三田学会雑誌』62巻4号、1964年4月）。

III

さて、なるほど労働力商品は歴史的な過程の中から創出されたことは確かなのだが、そのことの本質的意義は、実は次の点に見い出されねばならないであろう。労働力商品を創出する過程、すなわちいわゆる「本源的蓄積過程」は、「多人数の矮小所有の少数人の大量所有への転化、したがってまた民衆の大群からの土地や生活手段や労働用具の収奪（Expropriation）、この恐ろしい重苦しい民衆収奪²⁸⁾の過程であった。そしてこの「資本の前史」²⁹⁾、すなわち「賃金労働者ととも資本家を生み出す発展の出発点は、労働者の隷属状態だった」³⁰⁾のである。こうして明らかなように資本主義社会の創出とは「封建的搾取（Exploitation）の資本主義的搾取への転化」³¹⁾にほかならなかったのである。この過程において労働者から生産手段が奪い去られることになるのであって、労働者は資本家のもとで働かざるを得ないという宿命を負わされるのである。こうした意味において資本主義社会は、資本家と労働者との階級的対立関係によって基本的に貫かれているのである。

明らかなようにこのことだけでは直ちに、貨幣を資本へ具体的に転化させるものとしての資本制的搾取の論理を理論的に十分説明し得たことにはならない。こうした歴史的條件、それは資本制的生産様式的前提であり、出発であり、基礎をなすのであって、資本主義社会が資本主義社会として成立するためには、一方に商品や貨幣の流通が、資本制的生産様式を可能にするまでに発達していることが同時にまた必要なのである。すなわち、資本と賃労働という階級関係と、商品・貨幣の流通といういわゆる交換関係とが、生産関係としての階級関係が先行するなかで結合することが、資本制生産様式の核心として資本制的搾取を可能にするのである。そしてこうした結合を現実可能にし、資本制生産様式をその蓄積、循環過程としての再生産様式において支えているもの、それが実は労働範疇そのものなのである。労働範疇こそは、資本主義に先行する、あるいは範疇的には資

